

松本照男さんへの謝意・お別れのご挨拶 *2024年4月18日逝去

ポーランドへ渡り、日本とポーランドの歴史的な橋渡しの仕事をされました

塚本 智宏

松本さん！ お会いして、直にお伝えすべきお礼の言葉をたくさん抱えたまま、こういった形で謝意や思い出を述べることになったことをお許しください。

私のコルチャック研究や関連する“子どもの権利”ポーランドツアー企画の実現、また日本でコルチャック関係の講演会や研究会へのご協力、さらに本協会が関わったピウスツキやアイヌ関係のイベントに関する、外務大臣表彰=右写真=など思い出すことは山ほどありますが、何よりも、現地において、確かな同時通訳の仕事と現地調査の協力などで、本当にお世話になりました。



私が本格的にコルチャック研究に入り込んだのは2000年代からですが、勤務先の大学の職員が関連する研究書を探す作業の中でワルシャワの松本照男さんに行き着き、紹介されたのが最初でした。科研短期出張で三年連続ポーランドを訪れることになって、毎回最初から最後まで松本さんにお世話になりました。あわせて当時ワルシャワ大学の著名なコルチャック研究者である W・タイス教授夫妻にも合わせていただき、驚きました。

ポーランドのシベリア孤児救済

何とお二人は共同のテーマで(日本側からとポーランド側から) 史実の発掘をめざして、日本・ポーランドの友好関係のひとつのきっかけともなった第一次世界大戦後のポーランド人シベリア孤児救済に関わる研究やその後の孤児の交流などをバックアップしていたのです。

松本さん(と奥様、故ハリーナさん)とは、私のポーランド留学前にたまたま来日された札幌市内でお会いしたことを思い出します。松本さんは国費留学生として訪ポ以来50年以上、ワルシャワでジャーナリストとして活躍されましたが(『戦争と占領』岩波ブックレット、1989 など)、日本との関係では“たいしたことはできていない”と謙遜されていましたが、後でハリーナさんが「そんなことはない、テルオはワルシャワでとても素晴らしいことをしている…」と、尊敬する夫のことを日本語で話しておられました。

その頃の私は松本さんらがたいへんな努力で過去のシベリア孤児の方たちを自宅などに招いて交流を実現していたことは全く知りませんでした(松本

照男・ブィェスワフ・タイス著『シベリア孤児1921～1922年 ポーランド児童への日本の援助』ワルシャワ、2018)。

最近は敦賀に「人道の港敦賀ムゼウム」が開設され、この事実を日本側から探究・検証する作業もはじまり、その博物館の開館に合わせてワルシャワからお二人が招かれて来日したのが数年前です。今年六月にも、関連する日本側の記念イベントがあり、当時子どもの救援・支援に関わった社会福祉法人「福田会」の企画(「ポーランド孤児救済100年」東京・渋谷区=右画像=)の記念式典には松本さんも来日予定でしたが、残念ながらタイスさんお一人での来日となりました。



松本さんは、私のポーランド滞在中、車を飛ばして何度もトレブリンカに同行してくださり、時間を見つけては、ポーランドを何も知らない私のため、市内の戦跡、地下水道、近世ポーランドの歴史を体現する場所、宮殿、遠くクラクフにいた旧姓鈴木亜里さんとともに“ショパンの家”を訪れ、タイス夫妻と連れ立って遠くトルンの街への冬旅もありました。

が、何といっても中華風の店で鍋を食べるのが毎回滞在中の最高の晚餐で、そこでは日本酒の熱燗と一緒に飲みました。ポーランドへは必ず四合瓶をおみやげにトランクに入れていくのが松本さんとの“契約”で、満面の笑みでおちょこを口にされていたのを思い出します

コルチャック研究

最後に、これまでの私たちのコルチャック研究にお付き合いいただいたことに、改めて心からお礼申し上げます。ポーランド語版のコルチャック全集(ようやく完結)が日本国内に揃うようになったのも、松本さんのご協力によるものです。また、お宅で下宿をしながら、研究者となり単著を出すまでになった若い研究者の仕事も、いうまでもなく松本さんのお力添えによるものです。

コロナ禍もあけましたので、近いうちにまたポーランドにお酒をもってご挨拶とお礼に伺いたいと思っておりました。遠くワルシャワの空から我々を見守ってください。

(つかもと・ちひろ、日本ヤヌシュ・コルチャック協会代表理事、本会副会長、札幌国際大学特任教授)

松本照男氏の訃報に接して 尾形 芳秀

ポーランドでジャーナリストとして長く活躍された松本照男氏が4月18日に亡くなりました。氏は長年日本とポーランドの友好に努められ、その功績を称えて、2016年には在ポーランド日本大使館で外務大臣表彰を受けられました。

私と松本氏のご縁は、氏が「日本がシベリア出兵時にポーランド救済委員会からの要請により、シベリアのポーランド人孤児を救済したこと」を後世に伝えようとしていることを直接伺ったのが始まりでした。



松本照男氏, 2018.5
ワルシャワ旧市街にて
撮影 尾形芳秀

樺太残留ポーランド人の軌跡

一方、私は1905年の日露戦争後に樺太に残留したポーランド人に関心がありました。

日露戦争最後の戦いが樺太であった時、この島にそれまであったロシアの地獄のような流刑地は解体され、流刑囚は解放されました。その中にはロシア人のほか、ポーランドからの人々もいました。彼らは解放されて直ぐにも母国に帰ることができたのですが、母国は未だロシアの統治下にあり、母国の独立まで残留させてほしいと、戦闘中にもかかわらず願い出たのです。それは彼らのいう「ワルシャワ集落」(ノヴォ・アレクサンドロフスク、小沼)の人々でした。日本軍はその要請を受け入れ、約60名の残留が認められます。ロシア人の大半は沿海州に強制送還されました。

残留を希望したポーランド人たちは、サハリン島時代の20年間、そして樺太時代の40年間を日本人と共に過ごしました。樺太時代、彼らの子供たちは私たちと共に同じ学校で学び、中にはハルビン

のポーランド人学校に特待生として転校し医師となった人もおりました。

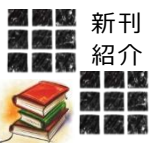
日本の敗戦により彼らとは長い別離があり、消息は不明でしたが、「ピウツキの蠟管」の報道があった1980年代から彼らの消息を探して再会し、B・ピウツキとの交流についての記憶を照会しました。その結果、1902年頃、ピウツキが極東からサハリン島南部のアイヌ民族調査に来た頃から彼らの支援(警備、輸送、宿泊、食料等)があったことが分かりました。サハリン島時代のポーランド人の支援無くしてピウツキの研究はあり得なかったとみられます。

この話を聞いた松本氏から「シベリア孤児救済」と相通じるテーマなので、ぜひ後世に遺してほしい」とのお誘いを受けました。「そのポーランド語版は私が引き受ける」ともいってくださいました。しかし、多くの資料の解読と執筆に手間取り、それが間に合わなかったことは本当に悔やまれます。

これまでのご厚誼に感謝するとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

(おがた・よしひで、樺太郷土史研究会及び本会会員)

霜田千代麿さんの俳句を読んで 嵩 文彦



新刊
紹介

樹木は何千年生きてきても、もう生きるのに疲れはてた、もういつ終わってもいい、とは言いません。樹木は黙って枯れるまで生きてゆくだけです。

人は意識や言葉という余分なものを持ってしまいました。それで、詩を書いたり俳句を作ったりもします。「信じる」ことも人しかできない行為です。



霜田千代麿さんは『俳句の宙 2023 精選アンソロジー』(本阿弥書店)を残して逝かれました。十五人の作家の百句がそれぞれ掲載されて1冊にまとめられたものです。

私は五・七・五の定型を守るだけで句を作っています。その私に伝統俳句作家霜田千代麿さんの俳句を読む機会が与えられました。

雪と記し一日をはる日記かな

一日止むことなく雪が降っておりました。一日何も積極的にすることもなく過ごしました。

明治維新以来、立身出世せよ、克己勉励せよと

言われてきたことが、戦前・戦中派の頭にはこびりついています。無為に過ごすことは、決して悪いことではありません。新しいものを生むためには、休養を取ってエネルギーを蓄える必要があります。今の時代、頑張りすぎて鬱病になり、自ら命を絶つ人が出ます。雪のふる静けさをゆるやかに過ごし、日記に「雪」とだけ記すのは、とてもいいことです。

子規居士の目玉おそろし藤の花

この句は「瓶(かめ)にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり」が念頭に置かれています。腰椎カリエスで寝たきりの子規は死が近づ